

総合問題 (180分)

2023年2月25日

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は片面印刷で11ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙は5枚です。解答はすべて解答用紙の所定の場所に記入しなさい。
- 4 解答用紙とは別に、下書用紙が2枚あります。必要に応じて自由に使用しなさい。
- 5 受験番号は、すべての解答用紙の所定の欄(2か所)に必ず記入しなさい。
- 6 配付した解答用紙は、試験終了後にすべて回収します。
- 7 試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰りなさい。

このページは空白である。

第1問

以下の文章は、伊豫谷登士翁の『グローバリゼーション』からの抜粋である。文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。

国境を越える膨大なカネ、モノ、そしてヒトの移動が場所を大きく変えてきました。この半世紀ほどのあいだに、これまでとは比較にならない規模で、世界のさまざまな地域で生産されたモノが大量輸送手段の発展によって結びつけられ、人類がこれまで経験したことがない大量消費社会を世界的な規模で生み出してきました。

世界経済における分業は、しばしば工業製品の生産をおこなう先進諸国と自然条件に制約された原材料を生産してきた旧植民地地域との、農工間分業として捉えられてきました。第二次世界大戦後の世界経済最大の問題と捉えられた〔 a 〕問題とは、貧しい南の国々の工業化の問題でした。世界経済における最大の不安定要因は〔 a 〕間の経済格差であり、南の地域の膨大な失業者の存在であって、その解消策として数多くの「開発論」が展開されました。

しかしながら 1960 年代以降、多国籍企業と呼ばれてきた巨大企業は、衣服産業に典型的にみられるような、世界的な規模での国際的な商業下請けのネットワークを作り上げるようになります。その後、エレクトロニクスなどの先端産業の部品下請けを発展途上国で展開するようになり、発展途上国はグローバルな製品ネットワークのなかに組み込まれることとなりました。

生産拠点の移転は巨大企業だけではなく、中小規模の製造業、さらには発展途上国のなかで工業化をいち早く達成した新興工業国へと拡がり、かつての農工間分業に代わる新しい国際分業、すなわち産業化した発展途上国を巻き込んだ「新国際分業」が展開されるようになります。多くの発展途上国では都市化が急速に進み、都市にはニュー・リッチと呼ばれる新中間層が出現し、発展途上国がグローバル企業にとっての新たな消費財市場にもなっていました。

生産のグローバルな展開は、それに伴うさまざまなサービス部門のグローバルな展開を促し、天文学的なカネの流れが、経済や政治だけでなく、人々の日常生活の基盤を侵食し、ライフスタイルや価値観までも変化させてきています。

(中 略)

それでは、グローバリゼーションとはどのような時代かという問いを念頭に置きながら、「移動」と「場所」という問題を立ててみましょう。

モノやカネなどさまざまな移動がありますが、ここでは、ヒトの移動に焦点をあてます。その理由は、モノやカネの移動に比べ、ヒトの移動には社会の変化が直接的に投影されており、時代の変化を集約するからです。モノやカネの移動はこれまでとは比較にならない規模に膨れ上がり、情報が瞬時に世界を駆けめぐる時代です。これらの移動には基本的にはヒトの移動が伴い、移動は場所のあり方を変えてきました。しかしながら、モノやカネの移動と比較して、ヒトの移動は

依然として境界によって厳しく制限されています。グローバリゼーションと呼ばれる時代に、移動がどのような場所を生み出してきたのかを考える重要な鍵が、モノやカネや情報の自由な移動とヒトの移動の制限との対照性、ズレのなかにあります。

ここで問題となっているのは、新たな大量移民・難民の時代に入ったということだけではありません。〈いま〉という時代が直面しているのは、移民や難民に対する共通した理解や認識が揺らぎ、こうした人々を保護する人権などの理念や手段が次第に閉ざされてきているという事態です。これらは、しばしばナショナリズムあるいはポピュリズムとして批判的に論じられ、ときにかつての戦時を想起させる状況に近づきつつあると指摘されることもありました。しかし世界で広がる極右といわれる勢力の台頭を、かつてのファシズムの時代への回帰と短絡的に同一視することはできないでしょう。

人権や民主主義という戦後の国際政治で掲げられてきた理念は、たとえ建前であったとしても、かろうじて大きな戦争を食い止める防壁として機能し、人種差別は正当性を失ってきました。しかしいま、悲惨な戦争を繰り返さないために創り上げられた戦後の枠組みや規範が、大規模な人の移動によって、そしてコロナ禍のなかであっけなく崩れようとしているようにみえます。そして現代の移民や難民と呼ばれる人たちをめぐる混沌とした閉塞状況のもとで、欧米諸国の政府は、移民を制限し、あるいは国境を閉鎖するという時代錯誤と思える政策を掲げるほかには、有効な政策を見いだせないでいます。なぜ人権や民主主義という理念は、このように急速に色あせてしまったのでしょうか。

この混沌とした状況の底流には、多くの人たちが指摘してきたように、近代世界の基盤であった国民国家という体制の揺らぎがあります。近代の政治や経済、文化などは、国民国家という一定の固定した場所とそこに住む人々を、本来あるべき姿、自明のものと考えてきました。それゆえに移民や難民は、国民国家という本来あるべき場所から逸脱した人々ということになります。場所を固定的・静態的に考え、そこから移動を捉えてきたのです。しかしながらいま移動と場所の関係性を柔軟に考えて、国民国家という場所を捉え返すことが求められています。

私たちの思考はしばしば、定住している人々のあり方が常態／正常であり、移動する人は〈例外〉あるいは正常ではないと、無意識にみなしてきました。社会科学は基本的に、ある定まった境界によって画される場所に人々が定住することを暗黙のうちに〈常態／正常〉とみなしてきたのです。移民あるいは広く人の移動というテーマは、逸脱した人々の正常な状態への回帰、といった物語でもって捉えられてきました。

しかしながら、移動から場所を捉え返すことによって、ある定まった場所を所与としてきた近代国家の、そして社会科学の課題が浮き彫りになります。移民や難民にかかわる研究は、こうした近代の知の枠組みがもつ制約を明らかにしうるはずでした。しかし、人の移動を対象とする移民研究も、あくまである正常な場所での定住を本来のあるべき状態として構想してきました。移民研究は、正常から逸脱した移民がもう一つの別な正常にいかにして戻るのか、あるいはもとの常態にいかにか回帰するのかという物語として、展開されてきたのです。移民研究は、定住の観点

から逸脱とみなす人の移動を研究してきたのであり、移動そのものを取り上げたわけではなかったのです。

どこか定まった場所に〈定住〉することが人々の正常なあり方だとする考えからは、移動と場所をつなぐ「経路」は、そして (b) 移動によって創り出される場所の多様性は、抜け落ちることになります。これまで移民や難民に対する政策において、さらに移動を考える場合においても、定住を正常とみなし、〈移動〉を本来あるべき正常な均衡からの逸脱と考え、常態としての〈場所〉のあり方を固定的に想定したのです。こうした思考は、国民国家を暗黙の前提としてきた社会科学に深く浸透しています。しかしそのことが、移民や難民に対する政策的な隘路^{あいろ}を生み出し、国民国家が揺らぐ〈いま〉という時代の抱える課題を見えなくしているのです。

増え続ける移民労働者への反発が高まりながらも、移民に依存せざるを得ない先進諸国。防衛目的だけでなく、石油やその他の稀少資源の利権を維持するために軍事的な戦略から介入を続ける大国とますます激化する地域紛争によって生み出される難民。グローバル資本の浸透によって広がる経済格差と移民の送金に依存する経済の拡大。これまで国民経済という単位で曲がりなりにも維持されてきた労働市場は、国民国家の揺らぎのなかで変質してきています。

人々の生活はますますグローバル化し、そのことが否応なくヒトの移動の拡大を引き起こし、膨大なヒトの移動は国際政治の最大の争点として浮かび上がってきました。アメリカにおける中南米から北米をめざす移民キャラバン、EUにおける膨大な域内移動とイギリスの (c) EU 離脱、欧州各国における反移民感情と極右の台頭、アジアやアフリカでの移民労働者や難民への排撃と虐待。21 世紀に拡大してきた膨大な人の移動は、資本や情報の移動を反映したものです。

国際移住機関 (IOM) によれば、生まれた国を離れて外国で暮らす人の数は、2 億 8,000 万人を越え、世界人口の 3.6% に達すると推計されています (2020 年現在)。しかし境界を越えて暮らす人々、生活の場を求めて動き回る人々、国家的な暴力や制約から逃れようとする人々などの数は、統計として捉えられている数をはるかに上回るでしょう。さらに移民や難民と呼ばれる人々と観光や留学などの一時的と分類されてきた移動との境は曖昧です。いまや誰もが潜在的には移動する民なのです。

膨大な規模の難民や増え続ける移民の流入は、欧米諸国だけでなく多くの国の政治的、社会的な分断を露わにし、世界大戦の過程で封印されてきた人種や民族にかかわる諸問題を噴出させてきています。さらに市場経済の浸透が各地にもたらした亀裂が、移民や難民と呼ばれた人々の移動を契機として表面化しました。第二次世界大戦の経験を踏まえて、西欧諸国は人種差別を強く批判し、人権思想の浸透を主導してきました。しかしいま、年間 100 万人を超える難民や法制度の統治から除外された膨大な移民労働者の流入に直面して、欧米諸国は排外主義的な運動に対する有効な政策を見いだせないでいます。

人の移動が近代世界を創り上げてきました。しかし移民や難民の存在が政治の大きな問題として現れてきたのは、それほど昔のことではないのです。国境に画された国民国家という体制のもとで、人々の移動の管理や支配が圧倒的な規模で展開されたのは、二度の世界大戦の時期ですし、

現代の移民や難民政策の原型がかたちづくられたのは、第二次大戦後の大規模な人の移動が「正常な状態への回帰 = 〈故郷〉への帰還」というかたちをとったことによります。また、政治課題としての移民危機、そして移民研究なるものが広く認知されるようになり、さらに移民や難民に対する基本的な認識が浸透したのは、欧米諸国において高度経済成長が終わった 1960 年代以降でした。

国境を越える移動は、これまでも「故郷」を生み出し、ナショナルなものを喚起してきました。第二次世界大戦と戦後の未曾有の規模の人の移動によって、かつての植民地を含めて国民国家は再編成されて、国境と国民が再確定されたのです。ナショナリズムに席卷された悲惨な戦争の経験から、国境を越えて移動する移民や難民に対する国際的な規範や理念が創り上げられました。その後の高度成長の時代に人の移動は拡大し、移民・難民問題といわれるものは、日本を含めて、いまやあらゆる国が直面するグローバルな課題となってきたのです。

移動する人々は、グローバル資本が創り出した世界編成に組み込まれ、その多くは安価な労働力としての移民労働者になりました。その労働力は、これまでの生産やサービスといった活動だけでなく、最近では介護や看護などの人の再生産領域にますます拡大してきています。移民労働者は、生命の再生産という国民国家の根幹に深く入り込み、国家と個人との中間にある家族やコミュニティという領域、そして社会を大きく変えてきています。

グローバリゼーションは、経済成長に支えられた豊かさと福祉政策に、大きな亀裂と分断を持ち込みました。これまでも先進国と呼ばれる国々は、一方で難民や移民の流入に対する排外主義が拡大しながらも、他方では高齢化社会の福祉を維持するには (d) 彼ら・彼女らに依存せざるを得ないというジレンマに直面してきました。人権などの理念、内外人平等の原則がこの矛盾を乗り越えるための解決策として掲げられ、その帰結として、移民と国民との差別は制度上は抑えられてきました。移民を管理する政策は、しばしば国民を管理する政策の裏返しであり、移民のシティズンシップ（市民権）が問題となるのは、まさに国民の範囲が揺らいでいることの反映でもあります。

近代は、たえず崇高な理念と力の現実とのズレを内包してきました。平等は差別を内包し、自由と強制は表裏の関係にありました。国民と他者としての外国人は分割され、民主主義や人権が実現される場は領土のなかに制限されてきました。そして、移動する人々は、言葉を発する自立した主体の位置ではなく、物言わぬ、保護対象であり続けてきたのです。移動する人々を人権の被害者、保護されるべき対象とすることによって、国民国家という領域の持つ支配の構図を覆い隠してきたと言えるかもしれません。

21 世紀のいま、これら移動の規模は加速度的に膨れ上がり、もはや対処しえないほど大規模な移民や難民を引き起こしてきました。現代の大規模な人の移動は、西欧中心に創り上げられた近代世界への反乱であり、異議申し立てでもあります。こうした混沌とした状況に対処しうる能力を持ち合わせているのは、そしてグローバリゼーションに対抗する有効な手段を提供できるのは、いまのところ国家という制度しかないでしょう。しかしネットでつながった社会は、もう一つの

可能性をもつかもかもしれません。新しい情報化社会のなかで、領域性を越える開かれた場所を追求し続けることが求められるでしょう。

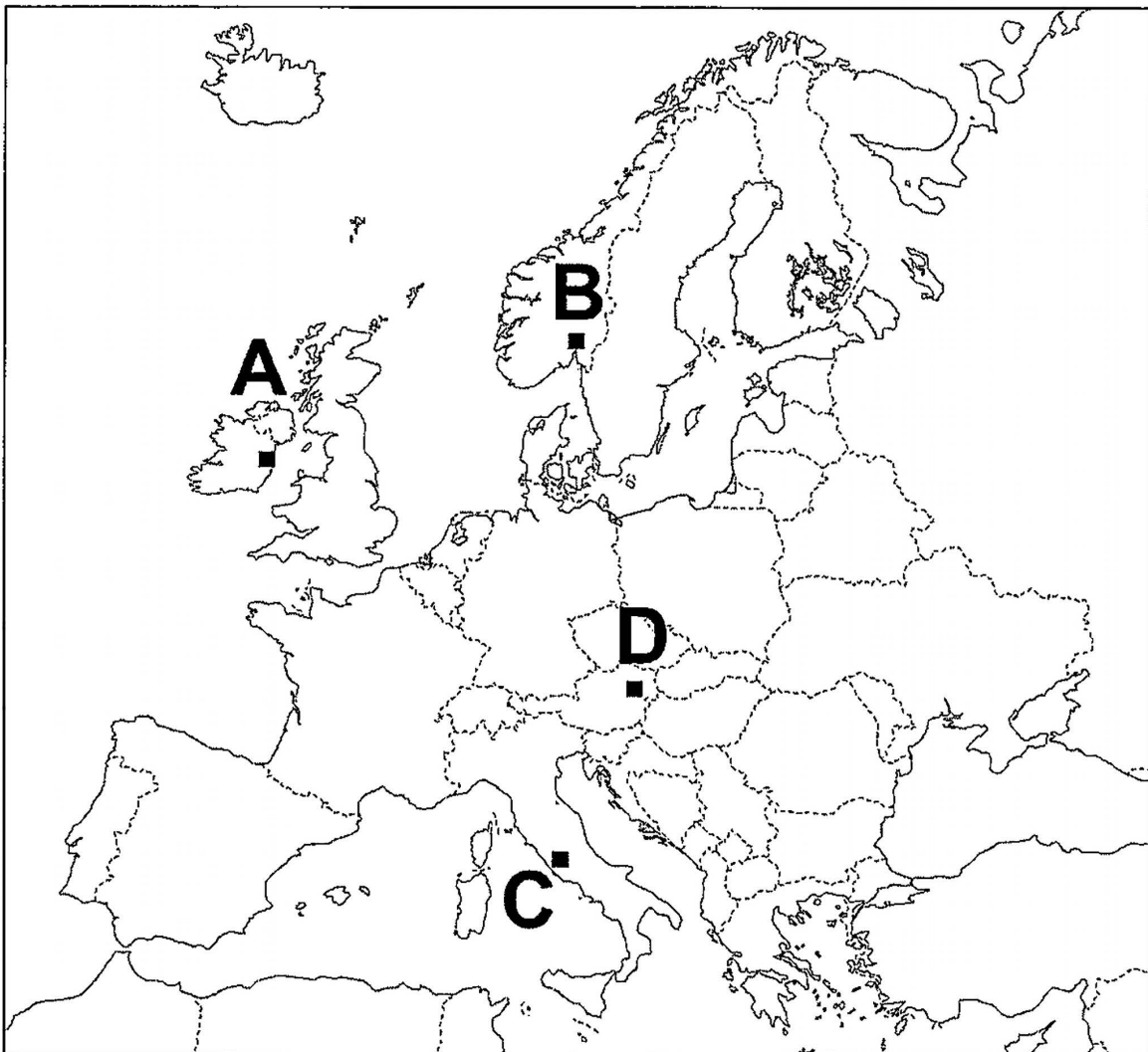
出典：伊豫谷登士翁『グローバリゼーション』（ちくま新書，2021年）より抜粋。必要に応じて表現等を変えている。

問1 本文中の〔 a 〕にもっともよくあてはまるものを、下記から選び、番号で答えなさい。

- ① 先進国 ② 東西 ③ 多国籍企業 ④ 南北

問2 下線部 (b) 移動によって創り出される場所の多様性は、抜け落ちるとあるが、その理由を本文にそくして80字以内で答えなさい。

問3 下線部 (c) EU離脱について、EUに加盟していない国の首都を、以下の地図中の都市A、B、C、Dからひとつ選んで記号で答えなさい。



(出典：平凡社地図出版 <https://www.hcpc.co.jp/library/20200731-5.html> より作成)

問4 下線部 (d) 彼ら・彼女らとは、誰のことか。本文にそくして具体的に50字以内で答えなさい。

問5 筆者は、グローバリゼーションを移動と場所に着目して論じている。あなたの日々の暮らしの中でグローバリゼーションの影響があると思われる事例を挙げ、そのメリットとデメリットを指摘し、デメリットを改善するためにはどのような方法があるのか、500字以内で論じなさい。

著作権保護の観点から、公開していません。

著作権保護の観点から、公開していません。

[Adapted from Simon Rich, “The New Poem-Making Machinery: Shall code-davinci-002 compare thee to a summer's day?” The New Yorker, 21 June 2022, <<https://www.newyorker.com/culture/culture-desk/the-new-poem-making-machinery>>]

注 hoax 悪ふざけ
cursive writing 筆記体

問1 下線部 (1) で筆者が驚いたことを2つ日本語であげなさい。

問2 下線部 (2) を日本語で要約しなさい。

問3 筆者はなぜ下線部 (3) のように思ったのか。日本語で具体的に説明しなさい。

問4 下線部 (4) はどのようなことを意味するのか。日本語で具体的に説明しなさい。

問5 In the reading, the author discusses how A.I. can be used to write poetry. In the future it is likely that A.I. will be more widely used in society. Do you think this will be positive or negative for society? Write your answer in your own words in English in the space provided on the answer sheet. Be sure to include specific details or examples to support your ideas.